報告２

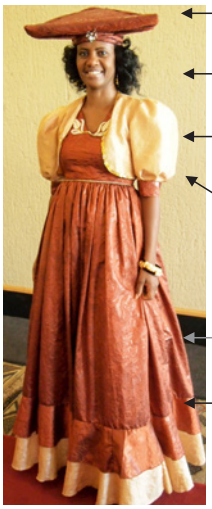
ナミビア・ヘレロ人のエスニックドレスに見る歴史性とファッション

４つのショーから

香室 結美

熊本大学

本日焦点を当てるのは、南部アフリカ、ナミビアのヘレロの女性が着用するロングドレス（資料２－１）です[1]。ほとんどがオーダーメイドで、ロングドレスの作り手であるドレスメーカーに体型を測定してもらい、デザインや価格を相談して作ります。親戚に作ってもらったり、自分で作る女性もいます。ロングドレスは冠婚葬祭で着用されるほか、特に年配女性によって日常的にも着られています。一方、都市で働いているヘレロ人の女性や若者層は、日常的にはジーンズ、スカート、シャツといったいわゆる洋服を着ている場合が多く、着用状況にはかなり個人差があります。なお、本日お見せする写真や映像は、表記がない場合は発表者が撮影しています。



資料２－１　ロングドレスを着たヘレロ女性
筆者撮影

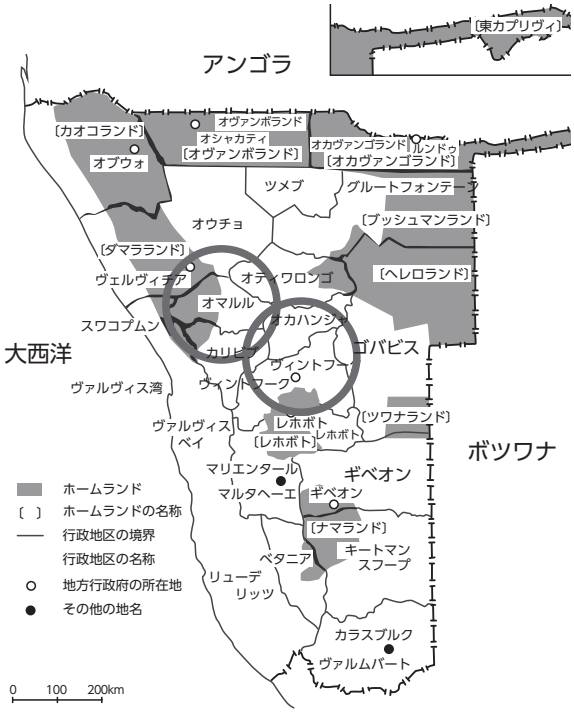
ロングドレスは19世紀末、ドイツ人宣教師の妻によってヘレロ社会に導入され、縫製技術の普及とともにヘレロ女性に受容されたと言われています。資料２－２の左の写真は、1900年ごろにライニッシュ宣教団の宣教師によって撮影された写真です。キャプションには、「伝統的皮のスカートと装飾品。ただし柄の布地のスカーフと、ヨーロッパスタイルのジャケットが組み合わされている」とあります。そこから右の写真のような、本発表でロングドレスと呼ぶ女性の衣服に変化したと考えられています。向かって左前列の方がおそらく宣教師の妻や宣教団の方で、彼女たちがヘレロの人たちに裁縫を教え、このような服を着始めたということです。男性はスーツや軍服風のユニフォームを着るようになりました。

資料２－２　ヘレロの伝統的な服装とロングドレスへの変化
ナミビア国立公文書館　左：No.26942(190?)／右：No. 11444(1900年前後)

1）本報告は『ふるまいの創造――ナミビア・ヘレロ人における植民地経験と美の諸相』の第５章「四つのファッションショー――媒介される複数の世界」を中心としている。

本日はヘレロの人々の衣服の歴史性とファッションについて、ドイツ植民地支配以降の社会・文化の再編成に伴い着用され始めたロングドレスの事例からご紹介させていただきます。発表者の研究テーマとしては、①「『他者の文化』がいかに『自分たちの文化』として創造され得るのか」、②「ヘレロの人々がいかにして衣服とそのふるまいに関する規範や着こなしを確立してきたのか」、③「植民地化という歴史的経験と、衣服を着るという日常的経験がいかに交差し、衣服とそのふるまいを洗練してきたのか」、このようなことを考えてきました。

本日はその具体的な事例として、①地方のロングドレスモデリング・コンテスト、②首都のロングドレスデザイン・コンペティション、③元宗主国ドイツでのファッションショー、④首都の国際ファッションショーという４つのショーから観察されるロングドレスの多様なあり方をご紹介したいと思います。前半は発表の背景的な部分を説明して、後ほどこの４つのファッションショーの具体的事例に移ります。



資料２－３　ナミビアの位置とホームランド体制下の行政区画

Republic of South Africa, “Report of the Commission of Inquiry into South West Africa Affairs 1962-1963”Pretoria, 1964を参照した［永原 1993：179］をもとに筆者作成

ナミビアのヘレロの歴史と先行研究

ヘレロはナミビアの人口の９パーセントほどで、ナミビアでは比較的少数派です。ヘレロ語を話し、主にキリスト教徒です。同時に祖先を通じて「聖なる火」と呼ばれる火の場で神と交流する慣習も残っています。牧畜を主な生業としていますが、商店や会社で働いたり、政府職に就いたりする人も多くいます。

ナミビアでは1884年にドイツ統治が開始され、1904年から1908年にかけてドイツ植民地軍による虐殺が生じました。これによって人口の約80パーセントが死亡しました。戦いの勃発後、「ヘレロ絶滅命令」が出されています。この虐殺に関しては、現在も一部のヘレロの市民団体や、その当時ヘレロとともに虐殺の対象になったナマ人の人たちが、ドイツ政府などに対し補償訴訟を起こしていて、その訴訟もまだ解決していない状況です。

生き延びたヘレロの人たちは、強制収容所に入れられるか、周辺国やブッシュの中に逃亡するか、もしくはドイツ人農場での労働に従事しました。第一次世界大戦後は、南アフリカが侵攻して実質的な統治を開始し、ドイツにとってかわりました。この時期にヘレロは共同体の再建を図ったとされており、親族が再度集まったり、家畜を増やしたり、廃れていた慣習が復興したり、記念式典が始まったりしました。現在ヘレロ文化や伝統と呼ばれているものは、この時期に再編成されたものだと考えられます。

資料２－３がナミビアの地図です。南アに統治されていたとき、いわゆるアパルトヘイト、ホームランド体制下の行政区域を示しています。1960年代にこうした区域が設けられました。発表者は、資料２－３の丸を付けたヴィントフークとオマルルという牧畜村のあたりで、主に2009年から2012年の間に約１年滞在して調査を行いました。

ヘレロの人々は本来流動的に生活していましたが、ドイツ帝国と南ア統治により、ヘレロという部族やエスニック・グループとしてカテゴリー化、固定化されてきました。1960年代には、人々をいずれかのエスニック・グループに帰属させて、居住地域としてホームランドを割り当てる、いわゆるアパルトヘイト体制が開始されました。したがって、独立後のナミビアではエスニシティの取り扱いが問題となっており、簡単にエスニック・グループなどとは言いづらい状況にあります。人口統計では言語による指標が立てられていて、「何々語を話す人が何人いるのでこの人たちは何パーセント」という計算をしている状況です。

先行研究①植民地経験とアイデンティティ表象
――「なぜ移住者の衣服を着るのか」という問い

ヘレロに関する先行研究として、まず植民地主義の歴史とアイデンティティ表象に関するものがあります。ロングドレスは、移住者との歴史的遭遇と戦いを想起させる衣服、アイデンティティ表象として取り上げられることが多くあります。「なぜ彼女たちはドイツ人移住者の衣服を自分のアイデンティティを示す衣服として着続けているのか」、「ドイツ人移住者の軍隊様式、旗、行進、記念式典などは、ヘレロの自己表象や象徴的規範、そしてアイデンティティ構築にどう関わってきたのか」ということがよく問われてきました。

特に注目され、ほとんどのヘレロ研究者に取り上げられるのが、ヘレロ語で「オクヤンベラ(*okuyambera*)」と呼ばれる記念式典です。オクヤンベラ本来の意味は簡単に言うと「墓参り」で、ここでは偉大な歴史的統率者[2)]や祖先の墓地への巡礼のことを表しています。先述したように、1904年の虐殺から生き延びたヘレロの人たちは各地に散らばっていました。その後1923年に、亡命先のボツワナで客死した最高首長サミュエル・マハレロの遺体がナミビアに送還され、彼の祖父と父が眠るオカハンジャという地域の墓地に埋葬されました。そのとき多くのヘレロの人たちが、この埋葬の場に集合しました。虐殺後初めてのことです。この墓地への巡礼がその後形式化して、年に１度の記念式典としてヘレロ社会に定着します。

この記念式典で、男性は軍服風のユニフォーム、女性はロングドレスを着用しています。資料２－４上写真の右側に見えるのが女性です。式典の参列者たちは、サミュエル・マハレロの色として伝わる赤を軍服やドレスに取り入れ、自分がマハレロ一族の民であることを表すようになりました。ナミビア各地で年に１度、週末の３日間、マハレロだけではなく他の統率者やチーフが亡くなった日に集まり、その墓に向かって行進します。

現在ナミビア政府公認の伝統的権威として、７人ほどの公的に認可されたチーフ[3)]が存在しています。その他、公的に認められていない自称チーフも複数存在していて、ヘレロ社会には複数のチーフが並列している状況です。

資料２－４　記念式典「オクヤンベラ」(墓参り)
2009年、オカハンジャ、旗隊の墓地への行進

ヘレロの人たちは、普段は墓地に近づくことは許されていませんが、この式典の際には墓地に入ることができ、チーフから顔に水を吹きかけられる祝福を受け、ドイツ植民地軍との戦いの歴史やチーフたちの逸話のスピーチがなされ、それが国営ラジオのヘレロ語チャンネルで中継されます。

資料２－４で行進をしている人たちは模擬軍隊組織(troop)で、現地語では「オテュルパ」、単純に旗隊を意味する「フラッグ」とも呼ばれます。このヘレロの旗隊は、ドイツ植民地軍の組織構造をモデルとしながら発展してきたとされます。男性の成員は軍服のユニフォームを着用し、成員間に総督や大佐といった階級を設けています。見かけは軍事的ですが、制服を着て行われた訓練はむしろ娯楽なものであると言われています。旗隊は式典の際に旗を掲げて墓地まで行進するだけでなく、寡婦の生活や葬式の補助などを行う自治的な補助ネットワークであるとして理解されてきました。

ヘレロの人々は、ドイツ人移住者や植民者の衣服を取り入れ、移住者の着こなしを学んできましたが、ドイツ人が着ていた服をそのまま着用してきたわけではないところに特徴があります。それぞれの一族の歴史的な統率者やチーフを象徴する色を組み合わ

2) 人々自身によって慣習的に支持され認められていたのか、植民地政府当局によって認可されていたのかを問わず、ヘレロを実質的に統率していた者を広く指し「統率者」の語を用いる。

3) ナミビアでは、1995年に制定された「伝統的権威法」(Traditional Authorities Act)で定められた「伝統的指導者」(Traditional Leader)が、「伝統的コミュニティ」の文化的指導者として政府に認可されている。

資料２－５　移住者からの着こなしの学びと各統率者や「チーフ」を象徴する色の組み合わせ

左から、白、赤、緑のドレスと旗

資料２－６　普段着〈左〉と式典用の白のロングドレス〈右〉

せ、旗隊としての行進の仕方や着こなしといった式典でのふるまいを整え、養ってきました。資料２－５に示したのが、統率者やチーフを象徴する３色を取り入れた衣装です。各ヘレロ人がどの人物をチーフとするかによって、それぞれ赤（マハレロの一族）、白（ゼラエウアの一族）、緑（ングヴァウヴァの一族）のいずれかに属しています。

記念式典や葬儀からは、移住者との接触以前にはなかった衣服とふるまいを取り込み、統率者やチーフと大きく関わるかたちで独自に形式化し、集団内の差異の可視化を行いつつ、ヘレロの集団としての文化的感覚の再生産及び自己形成を行ってきたことがわかります。行進、祝福の儀礼、戦争を再現したような歌や踊りといったふるまいが毎年記念式典で反復され、それがヘレロとしてのふるまいとして身体化されています。この点は本ワークショップでも着目されている規範の部分に関することだと考えられます。

資料２－６の左の写真は女性のロングドレスの普段着で、式典やチーフの葬儀に参加する際は右写真のような式典用ロングドレスに着替えています。式典用のロングドレスでは黒いジャケットが重視されていて、このジャケットは記念式典や葬式の場でのみ着用されます。ジャケットの着用は祖先への敬意を表すとされており、他の場で着回すことは禁じられています。この記念式典がヘレロ研究ではかなり注目されてきました。

先行研究②日常的感覚への着目
――「いかに入手し、どう着るのか」という視点

ヘレロに関する先行研究の第二のアプローチとして、日常的感覚への着目があります。実際に私が現地で暮らしてみると、当たり前ですが、第一のアプローチにおける問いが、日常では重視されないことがわ

No.20190　19世紀末

No. 27438　1950年代Windhoek

No.20590　1984年

ヘレロ女性私物　1997年頃

2012年筆者撮影

資料２－７　オシカイヴァの変遷

かってきました。ヘレロの生活で求められたことはむしろ、ロングドレスの種類や着方、入手法、布の選び方、作り方、着こなしといったふるまいを、自分自身も学習し身につけなければならないということでした。ヘレロの人々と暮らすには、「なぜ着るのか」ではなく「いかに着るのか」が重要になりました。

ここで、アフリカのファッションについて研究を行う人類学者のカレン・トランバーグ・ハンセン（Karen Tranberg Hansen）が着目していた「衣服能力（clothing competence）」、あるいはファッション性に着目することができるのではないかと考えました［Hansen 2004］。ハンセンは「衣服能力というのは、着飾られた身体の披露とふるまいのなかでトータルルックを生産するために提示され、その成功と失敗の可能性はコンテクストに依存する」と述べており、衣服能力を「TPOや文化的背景に合ったトータルルックを自らの身体で提示するための力」という意味で用いています。

またハンセンは「民族衣装」に代わる語として「ドレス」という語を用いており、報告者もそれにならっています。このドレスは、衣服と衣服に合わせるアクセサリーや帽子などを含むコーディネート一式を指します。一般に浸透している民族衣装という語は、出自、習慣、言語等を共有する特定の民族のみが着用してきた不変の固定的な衣服を連想させますが、ロングドレスの着用者であり、ここでヘレロと呼ぶ人々のエスニシティは、他者との相互行為によって変化する動的なものであるうえに、本来流動的だった人々がヘレロという部族やエスニック・グループとして入植者によってカテゴリー化されてきたという歴史があります。ヘレロが着るロングドレスもまた、彼女たちのエスニシティと同じく固定的ではありませんでした。西洋や日本の衣服と同様に、ロングドレスにも流行があり、デザイン、素材、色に関する好みは変化しています。

ハンセンの研究は、西洋の衣服のみが想定されがちなファッションを、全世界的な動向として位置付け直したという点で重要だと考えています。どこで暮らしていてもどのような服を着ていても、流行は存在し、ファッションであり得ます。特にアフリカでは、「伝統的／現代的」、「アフリカの／西欧の」、「ローカルな／グローバルな」という二項対立が問題視されますが、それはやはりヘレロのロングドレスにも当てはまりませんでした。報告者は、これをどう考えればいいのかについて研究してきました。

ヘレロのロングドレスでは、水平に伸びた牛の角を模していると言われる「オシカイヴァ（*otjikaiva*）」というかぶりものが特徴的で、現在では「これがないとヘレロのロングドレスじゃないよね」と言われます。しかし、これも実は資料２－７の左上の写真のように19世紀末にはなくて、徐々に横に伸びてきたことがアーカイブの写真調査からわかりました。オシカイヴァも変化してきていて、ここ100年ほどで整ってきた新しいものと言うことができます。

4つのショーにみるロングドレスとふるまい

ここからは、4つのショーから見えてきた異なるロングドレスとそのふるまいを紹介しながら、ヘレロがどのようなロングドレスやふるまいを「美」とみなしているのかについて考えてみます。

ファッションショーやビューティーコンテストは、女性や男性に対する単一の理想像をつくり出し、そのイメージを再生産する場であるとされてきました。しかしロングドレスのファッションショーには、ショーごとに異なる審査基準と求められる適切なふるまいがあり、単一の理想像ではなく、複数の像が観察されました。

地方のロングドレス着用モデリング・コンテスト――牧畜民的ふるまい

まず地方の農村部であるエプキロという地区で開催されたロングドレス着用のモデリング・コンテストを取り上げます。エプキロは、アパルトヘイト時代にヘレロの居住地として、多くのヘレロが強制移住された牧畜が極めて盛んな地域です。発表者は審査員として招聘された当時19歳の人気デザイナーであるマクブライトと、モデルとして参加したカペナという42歳の女性に同行し、コンテストを調査しました。

当時ヘレロの人々はナミビア各地で、小規模のロングドレス・コンテストを開催していました。このときの参加者は30歳代から40歳代のモデル８名、審査基準は「笑顔」、「外見」、「性格」、「ドレス」、「舞台でのパフォーマンス」でした。

資料２－８の上写真がカペナとマクブライトで、部屋でドレスの準備をしているところです。上から２番目の写真は審査員が審査をしているところ、３番目の写真が観客、一番下が舞台上のモデルたちです。

このモデリングで特徴的だったのが、「ウシのように歩く」というヘレロ独特のウォーキングです。前方をまっすぐ見据えて、直線的に早足で歩く西洋的なファッションショーのウォーキングとはまったく異なっているウォーキングが行われていました。日常においても、「ロングドレスを着用したヘレロ女性は、決して走ったり、急いで歩いたりしてはならず、一歩ずつゆっくり歩を進めなければならない」とされています。モデリングでは、ウシのように歩くウォーキングがパフォーマンスとしてより定型化され、優美さの基準となり、審査対象となっていました。

資料２－８　地方のコンテスト〈2012年〉

このウォーキングを見て、実際その場にいた私は、ちょっとポカーンとしてしまいまして、どの人がいいのかもまったくわからない状況でした。しかもモデルというと10歳代から20歳代の若者を想像していたので、30歳代から40歳代の大柄な女性がモデルとして参加していたことに違和感を抱き、それをカペナにたずねてみました。すると、「この歩き方は若い子にはできないからだ」という返答が返ってきま

した。このコンテストでは、単に若い、表面的な美しさではなく、ヘレロ女性としての成熟度や熟練度が試されていたと言うことができます。

「ヘレロらしい」豊満な肉体が一つの審美的な基準になっていて、腰回りもペチコートを３枚から７枚重ねて、わざと膨らませています。この点も、やせ型のモデルが標準とされる西洋のショーとは大きく異なっていました。

首都のロングドレス・デザイン・コンペティション――流行デザインの希求と革新

二つ目として、首都で開催された「レジェンダリードレス・デザイナーズ」コンペティション＆ガラディナーを見てみます。2005年から2012年にわたって、年１回開催されてきました。私が調査した2012年の開催を最後に開かれていないそうです。

組織者はヘレロの男女約20名で、コンペの企画運営を行っています。この方たちは主にエリートの富裕層でした。組織者の目的は、①ロングドレス・デザインの現代化、②ロングドレスの販売促進、③草の根デザイナーの社会経済的後押し、④ロングドレスの魅力をヘレロ社会内外に発信することです。率直な欲求として、「私たちの素晴らしいドレスをランウェイで見せたい」、「ドレスの魅力を人々に知らしめたい」ということがよく語られていました。資料２－９がコンペの写真です。

エミィ・シランバという大学の講師をしている組織者に話を聞くと、「私たちはオホロクェバ（＝ドレス）が大好きなのよ。オホロクェバを守っていきたいし、生きたまま、おもしろいままにしておきたいの。もしドレスを新しいファッションと混ぜたら、それを着ない人はいないでしょ。デザイナーは揃っているから、美しい素材を手に入れさえすればヘレロドレスにファッションを持ち込めるの」と語っています。

また、首相官邸に勤務していた別の組織者は、それぞれの年でテーマが決められており、ある年には色のタブーへの挑戦を行ったと語っています。「ヘレロの女性が黒を着ることはタブーです。……中略……（自分自身は）夫のことはまったく考えずにオフィスに黒のスーツを着てくることもあるのよ。……西洋諸国では黒や白のドレスを〔特別なとき以外にも〕着ることができるわよね」ということで、ヘレロ社会における色のタブーについて考えたかったとインタビューで話していました。そして通常は花嫁が着る

資料２－９　首都で開催された「レジェンダリードレス・デザイナーズ」コンペティション＆ガラディナー〈2012年〉

資料２－10　「レジェンダリードレス・デザイナーズ」コンペティション＆ガラディナーのチケット

白のドレスも、他の場所で着ることもできるようなデザインに仕立ててもいいのではないかと語っていました。

組織者が成し遂げたことは、若者にも魅力が伝わるように、ロングドレスを現代化しながら新しい流行を生み出し、その存在と魅力を示すことでした。それによって、ヘレロ女性が楽しみながらヘレロ文化を継承することができるのではないかと言っていました。デザイン力のあるドレスメーカーの意識と技能の底上げ、知名度アップが確実に行われたのではないかとも語られていました。

ヘレロのロングドレスを作る人は、首都だけでも100人から200人いると言われており、かなりの数がいます。ヘレロ女性のデザインへの欲求と購買欲を刺激して、従来のロングドレスの規範への挑戦を行ったと言えます。そして国内におけるロングドレスの存在感をアップさせたと考えられます。

一方で、コンペという競うやり方に批判的なドレ

スメーカーの人もいます。「そんなことはやっていられない。こっちはお金のないなかで一所懸命に毎日服を作っているんだ」ということで、コンペ参加のデザイナーとかなり温度差が見られました。顧客の要望がコンペティションによって過熱した部分もあって、デザイナーに対するデザイン力向上の要求が高まり過ぎて、その後デザイナーをやめてしまった人もいました。

とはいえ、組織者とデザイナーの尽力によって、レジェンダリー・コンペティションは知名度を上げていき、ロングドレスがナミビアの特産品として紹介されるに至ります。

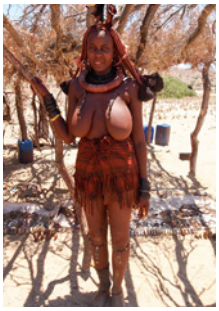
元宗主国ドイツでのファッションショー
── 起源との再遭遇

2010年、ナミビアの貿易産業省は、ナミビア独立20周年およびドイツ－ナミビアの貿易関係10周年を祝うトレードフェアと祝賀会を開催しました。会では他のナミビア特産品とともに、ロングドレスが取り上げられショーが行われました。

ここでヘレロの人たちは、ナミビアのローカルな特産品として最先端のロングドレスを発表しました。彼女たちとしては「自分たちのファッションを見せつけてやる」という意気込みでしたが、ドイツ側は当時のドイツ風ドレスと現在の最新のロングドレスを並べて歩かせるという出し物を演出しました。これはファッションと歴史を併置するという発想で行われたのではないかと考えられます。

このショーについて、組織者のインゲは、「ドイツ人が行ったショーでは、すごく素敵なオレンジのドイツ風ドレスをドイツ人モデルが着ていたの。……中略……その姿はまさに〔ロングドレスの起源とされる〕「ヴィクトリア風ドレス」だったわ。それから彼らは……中略……ヘレロにふさわしい体つきをした〔ヘレロ〕女性を登場させて、そのドイツ人女性と一緒に歩かせたのよ。これは……私は泣いてしまったわ。本当に素敵だったから」と語っていました。

解釈が難しいですが、現在でも虐殺に関する補償訴訟が続いていて、歴史的経緯から一般論としてヘレロがドイツ人に負の感情を抱いている部分はあります。しかしこのときは、ランウェイ上で時間と空間、美意識を共有したことによって、両者の間にファッションや美を媒介とした共通感覚が築かれ、そこに感動が生まれたと考えられるのではないかと思います。

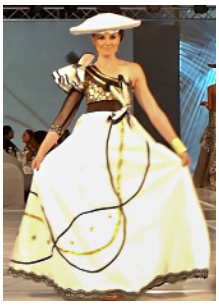

ヒンバの一般女性〈2012〉

マクブライトのドレス〈2012〉

オバンボの一般女性〈2010〉

マクブライトのドレス〈2012〉

ヘレロの一般女性〈2012〉


マクブライトのドレス〈2012〉

資料２－11　第１回ナミビア・ファッションショーで見られたナミビア内の民族集団の衣装をアレンジしたデザイン〈2012年〉

首都の国際ファッションショー
──ナミビアの「ローカル」ファッション

最後に、首都で開催された第１回ナミビア・ファッションショーを紹介します。これは国際的なファッションショーで、当時テレビ・コマーシャルがナミビアで全国的に流れていました。参加者はアフリカ各国のデザイナーが６名、ナミビアからは５名です。先ほど紹介したヘレロ人デザイナーのマクブライトも出場しています。

目的は、ナミビア国内で活動するデザイナーたちに国際的活動の基盤を与えることでした。マクブライトのドレスには、ナミビア国内の複数の民族の衣服をデザインに取り入れるよう開催委員から要請があったということです。資料２－11に写真で示したような、ナミビア内の他の民族集団、ヒンバやオバンボの衣服をアレンジしたようなロングドレスやドレ

スが作られ、発表されていました。他のナミビアのデザイナーは、いわゆる洋服、西洋的なデザインのものを発表していましたが、マクブライトに関しては、ナミビアのローカルファッション代表としての役割が求められていました。それに応えたということで、「優雅な伝統と現代的衣装の融合」と新聞各紙で報道され高い評価を得ました。

一つは、ヘレロ固有の衣服がナミビアの衣装としてグローバルな舞台へ出ていく可能性があるのではないかと思います。単にローカルでもグローバルでもなく、その間でロングドレスを創り続けることが、新しく、さらに固有なロングドレスというエスニックドレスの形と道を決定していくのかもしれません。

ロングドレスをめぐる複数の原理

本日の報告では、ロングドレスをめぐって複数の原理があることを示しました。一つは歴史性です。特にドイツ植民地主義の影響によって、ドイツ人移住者との関係のなかで衣服が着られるようになってきました。二つ目が記念式典です。ここでは祖先やチーフとの関係と色が衣服に直接的に関わっていました。三つ目が規範です。どんなロングドレスを、どのように、いかなる場所で着るのか。四つ目の原理がファッションで、都会的美意識と美への欲求、新たなデザインという部分があります。

ヘレロの人たちのあいだには、①戦争の経験（歴史）、②祖先やチーフとの関係（信仰と政治）、③牧畜（生業）との関係、④儀礼や日常的着こなしのなかで培われた規範が存在します。これはそもそも植民地主義をどう捉えるかという問題にも関係しますが、グローバルな部分とローカルな部分とが組み合わさった領域だと考えます。ロングドレスの美とふるまいは、ヘレロ自身の新旧の価値観、ヘレロとドイツ人、ヘレロとその他のナミビア人といった集団的他者との関係のなかで多様なかたちで発現してきました。これはナショナル＋グローバルという視点で考えることができると思います。

美やロングドレスの形状、価値自体もそのときどきに対峙する他者とのやりとりのなかで強化され、創り直され、調整され、生成されてきたのではないでしょうか。

最後に鷲田清一の議論を参照して考えます。「どうすれば西洋人のロングドレスをヘレロ女性の体に美しくフィットさせることができるのか」、そして「どのデザインならヘレロのドレスとして許容され、どこまでいくとヘレロのドレスでなくなるのか」を、ヘレロの人たちは自らの体で確認してきたのではないかと考えています。

そうだとすると、ロングドレスのファッションは、ロングドレスのふるまいをいかに理解し、模倣し、習得しながら、いかに着崩すのかという実践だとも言えます。ロングドレス・ファッションは、ヘレロ女性であることを着用者に強く感じさせると同時に、世界中のファッションと積極的につながろうとしています。それは「ヘレロ女性らしさ」とは何かを着用者に考えさせながら、誰も見たことがないスタイルをつくり出す刺激をヘレロの人々に与えていると思います。

参考・参照文献

永原陽子（1993）「『国民的和解』の実験――ナミビアの独立」林晃史編『南部アフリカ諸国の民主化』pp. 165–208、アジア経済研究所

鷲田清一（2013［2005］）『ちぐはぐな身体――ファッションって何？』（ちくま文庫）筑摩書房

Durham, D. (1999) “The Predicament of Dress: Polyvalencyand the Ironies of Cultural Identity,” *American Ethnologist*, 26(2), pp. 389-411.

Gewald, J-B. (1998) “Herero Annual Parades: Commemorating to Create,” In Klei, J. V. d. (ed.), *Proceedings CERES/CNWA Summer School 1994*, Utrecht: CERES.

Gewald, J-B. (1999) *Herero Heroes: A Socio-Political History of the Herero of Namibia, 1890-1923*, Oxford: James Currey.

Gewald, J-B. (2000) *We Thought We Would Be Free: Socio-Cultural Aspects of Herero History in Namibia 1915-1940*, Cologne: RüdigerKöppeVerlag.

Hansen, K. T. (2004) “The World in Dress: Anthropological Perspectives on Clothing, Fashion, and Culture,” *Annual Review of Anthropology*, 33, pp. 369-392.

Hansen, K. T. (2013) “Introduction,” In Adrover, L., Bastian, M. D., Bennetta, J.-R. & Hansen, K. T. (eds), *African Dress: Fashion, Agency, Performance*, London: Bloomsbury Academic, pp. 1-11.

Hendrickson, H. (1994) “The ‘Long’ Dress and the Construction of Herero Identities in Southern Africa,” *African Studies*, 53(2), pp. 25-54.

Hendrickson, H. (1996) “Bodies and Flags: The representation of Herero identity in colonial Namibia,” In Hendrickson, H. (ed.), *Clothing and Difference: Embodied Identities in Colonial and Post-Colonial Africa*, Durham and NC: Duke University Press, pp. 213-244.

Wallace, M. (2003) “‘Making Tradition’: Healing, History and Ethnic Identity among Otjiherero-Speakers in Namibia, c. 1850-1950,” *Journal of Southern African Studies*, 29(2), pp. 355-372.

Werner, W. (1990) “‘Playing Soldiers’: The TruppenspielerMovement among the Herero of Namibia, 1915 to ca.1945,” *Journal of Southern Africa Studies*, 16(3), pp. 476-502.

■質疑応答

帯谷知可（司会）　ありがとうございました。事実関係に関する質問等ありましたら、どうぞ。

後藤絵美　ヘレロの方々にとって、露出してはいけない部分、隠すべき部分というのが、規範としてあるのですか。それはどう変わってきていますか。もともとはかなり露出されていたのに、現在ではロングドレスになって、ほとんど足を出さないですよね。足を出すことは問題がないのでしょうか。

香室結美　近年、ヒンバの方たちが日本のテレビ番組でも取り上げられています。皮の衣装を着て、上半身は裸で、女性だと皮のスカートを穿いて、体に赤土とバターを混ぜたようなものを塗っています。ヘレロの人たちも、かつてはヒンバの人たちと同じような格好で、上半身も裸で過ごしていました。ロングドレスが入ってきてからは、足を出してはいけない、手も手首の少し上あたりぐらいまで、ということになりました。胸の谷間は強調していることがありますが、確実に露出をしないようにはなっています。

昔の衣装についてどう思うかを聞いたこともありますが、「いまではもう無理」という返答がかなりあります。ただし、「昔の自分たちの格好、現代のヒンバの人たちがしているような格好を見たら美しいとは思う。自分たちの起源でもあるし、美しいとは思うけれども、自分たちはいま胸を出すのはやっぱり恥ずかしい、それは無理だ」と言っていました。

ファッションショーでは、ノースリーブだったり片腕を出したりしていますが、若者は比較的許容していて、そういったファッションをデザインとして楽しむ部分はあります。しかし、高齢の方たちに聞くと、「これはちょっとないね、腕は出しちゃだめだよ」という話がありまして、そこは若年層と年齢高めの女性たちとのあいだでの規範のぶつかりがいがあると思います。

杉本星子　一つ確認ですが、この民族衣装の名称を「ロングドレス」と呼んでおられますが、現地でも「ロングドレス」と言われていますか。これは英語ですよね。大元の起源がドイツとの関係であるとしても、第一次大戦後ぐらいから式典で着られるようになったという背景もあって、南アフリカの支配下で名称として固定したのかどうかというのが一つ目の質問です。

もう一つは素材についてです。見ていると式典で着られているものは無地が多く、普段着はプリントでした。今日の報告には出てきませんでしたが、ご著書のなかでは、コンペティションでインド風のペイズリー柄が流行ったとも書かれていました。素材がどこで作られたものか、輸入品なのか、現地で生産しているのか教えてください。

香室　現地語では、英語でいう「ドレス」、一般的に言うワンピースのようなものをを「オホロクェバ」と言います。「オホロクェバ・ヨシヘレロ」と言えば「ヘレロのドレス」という意味で、「オホロクェバ・オンデ」と言えば――「オンデ」は「長い」という意味なので――「長いドレス」、「ロングドレス」です。現地語ではそう言われたら、それがヘレロのドレスを示していることがわかります。

杉本　現代のファッションショーのなかでも、そのヘレロの言葉で呼ばれますか。

香室　現在のヘレロの公用語は英語ですが、現地の人は「ヘレロ・ドレス」と呼ぶことが多いです。研究上も「ヘレロ・ドレス」でもいいのですが、研究者の間では「ヘレロ・ドレス」と言うことでドレスを固定してしまうのではないかという批判や議論もあるので、研究上は私も「ロングドレス」と呼んでいます。現地の人たちも「長いドレス」と言っているので問題ないと考えています。

杉本　問題があるというわけではなくて、ナショナルな枠組みのなかでエスニックドレスになってい

くときに、たとえばインドでも、「サリー」に相当する言葉は現地でいろいろありましたが、それが「サリー」に統一されていきます。このような事態はファッションには常に起こり得ると考えたので、そこを確認したいと思いました。

香室　素材は、普段着については主に綿です。ヘレロの人たちは牧畜民なので、もともと自分たちで布を織ることはしません。基本的には輸入品です。南アフリカや中国からの輸入品があります。チャイナタウンがナミビアにもあるので、そこで安いものを買って使うことが多いです。あとはタフタ、レースなどのナイロン生地、ポリエステルが、現在の特にハイファッションには使われています。

安城寿子　首都のレジェンダリードレス・コンペティションは流行を創出することを意図しているとのお話でした。流行というのは、流行色などある程度は欧米のトレンドの影響があると考えられますが、そういうものを意識して取り入れているのか、それともまったく欧米のトレンドとは関係なく、独自の流行を創出しようとするものなのか、教えていただけたらと思います。

香室　そのあたりについてはもう少し調査が必要だと思っています。日常的に雑誌やローカルテレビ、ケーブルテレビなどで世界中の映像が入ってきているので、そういうものを見て、セレブのファッションを意識している人もいます。たとえば先ほど取り上げていたチケットに、アンジェリーナ・ジョリーの写真がヘレロの女性と合成されていましたが、アカデミー賞などでセレブが何を着ているのかを意識している人もいるのでしょう。西洋の最先端のファッションをロングドレスに融合させてみて、それがヘレロの人たちのなかで何が流行るかにつながるのだと思います。

先ほど話が出たペイズリー柄も、１人のデザイナーが、とてもすてきなペイズリー柄のドレスをレジェンダリードレス・コンペティションで発表して、そのときのモデルが額に赤いビンディーを付けていたのですが、それが一部の若いヘレロの女性のあいだで流行りました。ビンディーを付けている人がやたらいるなと思ったら、「去年そのドレスが流行ったんだ」ということで、こうした流行が生み出されているようです。